

講演要旨



①「今春の凍霜害時の気象状況」

福島地方気象台 技官

おの でら こういち

小野寺 晃一 氏

今年4月、福島県内では凍霜害により28市町村でモモやナシなどの果樹を中心に甚大な農業被害が生じました。被害額は、全体で27億円を超え、記録の残る昭和55年（1980年）以降で過去2番目、平成以降では最も多い被害額となりました。最低気温が氷点下となり強い霜の降りた日の気象状況や、気象情報の活用について解説します。



②「果樹における地球温暖化の影響と対応研究」

福島県農業総合センター果樹研究所栽培科 主任研究員

あだち よしてる

安達 義輝 氏

福島県は全国有数の果樹産地で、その恵まれた風土により、モモ、ナシ、ブドウなどの暖地型の果樹とリンゴ、オウトウなどの寒冷地型の果樹の両方が栽培されています。近年の温暖化傾向下において、果樹全般に生育の前進化が見られており、栽培管理作業や病虫害防除を進める上で支障を来しています。特に、開花期の極端な前進化は、春の凍霜害リスクの増加につながることから、果樹生産現場におけるリスク回避や防止対策等の実施に向けた果樹の発育予測技術の開発が喫緊の課題となっています。当研究所では、果樹の安定生産の実現を目標に、発芽や開花の予測精度の向上に向けた研究を進めており、最新の研究状況について紹介します。



③「やませの気象・気候予測と

栽培管理に向けた活用法」

福島大学共生システム理工学類 准教授

よしだ りゅうへい

吉田 龍平 氏

東北地方の太平洋側に低温と低日照をもたらすやませは、生育遅延や病害を引き起こすことから農作物生産の関心事でありつづけています。やませの発生を予測することができれば事前の対策が可能になり、被害の軽減が期待されます。一方で地球温暖化が進行しており、東北地方の平均気温は上昇を続けています。このことはやませによる冷害のリスクが低下し、安定した作物生産が可能になっていくことを示しているのでしょうか。本講演では、東北地方をとりまく夏の気候のこれまでとこれからについて、やませを例に気象予測と作物生育予測それぞれの観点からお話しします。